

塙保己一と小笠原島

文：顕彰会事業委員 根岸久

東京から1,000kmの太平洋上にある小笠原諸島は、江戸時代は「無人島」(ぶにんじま)という呼び名でした。平成二十三年には、世界自然遺産に登録されていますが、この小笠原諸島が日本に帰属するまでには、領有権問題で紆余曲折があり、塙保己一の残した記録が我が国に有利な決め手となり、決着しています。

小笠原島は古来、日本の国(島)とされている方が、今日では沢山いると思います。

享保十二年(1727)小笠原貞任(さだとう)という浪人が「この島は自分の曾祖父である信州深志城主(松本城)小笠原民部少輔定頼が徳川家康の命を受けて、文禄二年(1593)に発見したものである」と、幕府に申し出ました。

「異無人島記」の記述をもとに小笠原諸島への渡航と領有権を江戸南町奉行大岡越前守忠相に願ひ出、翌年には一度は許可されましたが先遣隊として享保十八年(1733)大阪から出発した甥の小笠原長晃が遭難してしまい消息を絶つてしまいました。貞任は再度の渡航を願ひ出しましたが貞任の出自に疑念を抱いた忠相は詳細に調べ、貞任が島発見の証拠として提出した「異無人

島記」や「辰巳無人島訴状兼口上留書」の内容は、これまでの伝承に貞任が加筆し捏造したものであることが判明しました。

享保二十年(1735)貞任は詐欺の罪に問われ、財産没収と重追放に処されています。

そして、一世紀が過ぎてから小笠原諸島の領有権が国際問題となった時、幕府が日本人による先占の証拠として「小笠原貞頼による諸島の発見」を全面に掲げ、諸外国との交渉に臨んだだという不思議な歴史があります。

塙保己一は「世のため後のため」ということで、四十一年の歳月をかけて、「群書類従」六六六冊の百科叢書を刊行していますが、寛政五年(1793)には和学講談所の設立も行い、我が国有史以来の古典や関係資料を収蔵していました。

文久元年(1861)諸外国との間で、小笠原諸島の領有権が問題化します。九月十二日午後八時、幕府の林大学頭から、和学講談所二代目塙次郎忠宝のもとへ質問状が出されました。内容は「辰巳の無人島を小笠原とも言うが、その命名の由来が分かれれば答えよ。なお、今晚中に回答せよ」というものでした。次郎は直ちに事態を理解して和学講談所に収蔵されていた前述の訴状など当時の関係資料を詳しく調査し、次の回答を届けています。

「小笠原島は文禄二年(1593)小笠原民部少輔貞頼が高麗より帰朝の際に発見した島で以後、小笠原島と呼ぶ。当時、この島には住居は無く、そのため無人島とも呼ばれるようになった。それ以前の書には、無人島の名はない」と言うものでした。日本政府は初めて小笠原島と標記し、諸外国との交渉に臨んでいます。

外交文書には「各国公使殿。書状をもってご通告致します。わが国の属島である小笠原島については、これまで渡航を中断しておりましたが、今後は開拓の予定であります。つきましては、近來貴国の人が移住しているとも聞いておりますので、念のためご通告申し上げます。安藤対馬守信正

第8回塙保己一賞表彰式・記念公演を開催します

受賞者のご紹介

大賞

うしくぼ たきお
牛窪 多喜男さん
(川越市 64歳)
昭和60年、第一回視覚障害者柔道大会78キロ級優勝。同級でソウル及びアトランタパラリンピック金メダル。後進の指導に務めている。現在、川越市議会議員。

奨励賞

あさぎり ゆう
朝霧 裕さん
(さいたま市 35歳)
進行性脊髄性筋委縮症ながら作家、シンガーソングライターとして活躍。著書「命いっぱい、恋～車椅子のラブソング～」が全国家庭科教科書に採用される。

貢献賞

公益財団法人アイメイト協会
(東京都練馬区)
昭和32年、日本で初めて国産の盲導犬育成に成功し、先駆者として現在まで、1,200人以上の視覚障害者に盲導犬歩行を指導。

貢献賞

埼玉県立特別支援学校塙保己一学園PTA(川越市)駅周辺の違法駐輪が点字ブロックをふさぎ、視覚障害者の歩行の障害になることを防ぐため点字ブロック理解推進キャンペーンを実施。



昨年の表彰式の様子

日時 12月20日(土)
午後1時～
(受付は0時30分
から)
会場 セルディ

郷土が生んだ偉人「塙保己一」のように、障害がありながらも不屈の努力を続け社会的に顕著な活躍をしている方や障害者を献身的に支援している方を表彰する「第8回塙保己一賞表彰式」を開催します。入場無料です。ぜひご来場ください。
(埼玉県主催・本庄市共催)

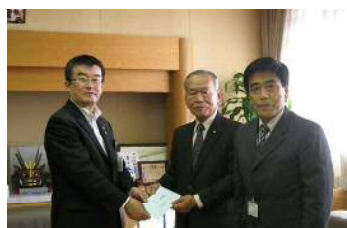
記念公演

表彰式後、午後2時から行われる記念公演は、和波(わなみ)たかよしさんと土屋美寧子(みねこ)さんによるヴァイオリンとピアノのデュオ演奏です。お楽しみに。



顕彰会へのご寄附ありがとうございます。

10月17日、ふるさと本庄歌謡祭実行委員会様より歌謡祭開催時の収益金・寄付金103,274円が顕彰会へ寄附されました。同委員会からは昨年、一昨年に続きご寄附いただいております。お預かりしました寄附は、塙先生の顕彰事業に役立たせていただく予定です。ありがとうございました。



委員会代表から会長へ手渡し

塙先生にあやかって…

(情報コーナー)

巾着袋が作成・販売されています。



児玉商工会(本庄市児玉町児玉 325-5 Tel.72-1556)では、偉業を成し遂げた塙保己一先生のように学業を成しとげ、社会にはばたこうとする人たちの力となるよう塙先生愛用の巾着袋を模して『巾着お守り』を作成しました。上記商工会館で1個800円で好評販売中です。



風光明媚な小笠原の島々



小笠原にある『無人島発見之碑』

保己一が設立した和学講談所の関係資料が列強の介入を辛うじて防ぎ、国の承認を得、正式に日本の領土となったのが、明治九年でありました。



パネル展示による啓発



塙保己一

塙保己一は、延享3年(1746)5月5日に武蔵国児玉郡保木野村(現本庄市児玉町保木野)に生まれました。「肝」の病で7歳の時に失明し、15歳の時に江戸へ出て盲人社会に入り、雨宮校校長須賀一の弟子となり、学問の道に進みました。生来の記憶力の良さと努力を重ね、賀茂真淵らの良き学者にも恵まれ、国学を研究し、寛政5年(1793)に幕府に申し出て、和学講談所を創立しました。また、安永8年(1779)から40年をかけて、群書類従666冊を編さん刊行しました。文政4年(1821)盲人社会の最高位である総検校に昇進し、同年9月12日76歳で亡くなりました。



塙保己一生家

本庄市児玉町保木野にある塙保己一の生家は「塙保己一の旧宅」として昭和19年11月3日に国指定史跡となっており、茅葺き二階建ての部屋は、保己一生誕前に父親の宇兵衛が建てたと伝えられています。家の前部を大きく切り上げた農園住宅で、民家としても貴重な遺構です。



塙保己一墓所



塙保己一は、文政4年(1821)9月12日76歳で逝去し、四ツ谷の安楽寺に埋葬されました。明治19年に萩野茂重郎が安楽寺の墳墓の土を持ち帰り、萩野家の墓地の南西隅に埋葬しましたが、明治44年児玉郡教育会が主となって、正四位階位奉告祭並びに没後90年祭の時に萩野家の墓地の東に移転し、保己一の孫の忠昭が持参した法衣を櫃に収め墓前に埋葬開眼しました。その墓所も、100年以上経過し、台石や外柵が老朽化し修繕が必要となったため、没後190周年記念事業として、墓所の安全保存のために、平成24年に塙保己一公園に移転しました。



群書類従

保己一は生涯で数多くの書物を編集し、出版していましたが、特に有名なものは「群書類従」です。我が国有史以来の貴重な書物を全国各地から集め、25部門に分類、整理し、出版しました。「群書類従」666冊が完成したのは、文政2年(1819)74歳の時で、34歳の時に「世のため人のため」に人々に役立つことをしようと決意してから41年が過ぎていました。



版木刷り体験

顕彰会では、上記のような塙先生の偉業に関する説明パネルを使用し、また、群書類従の版木のレプリカ(複製)を使っでの版木刷り体験など、市内外の様々な催しに参加して啓発を行っています。

ごあいさつ

季節はすでに紅葉の時期を過ぎましたが、会員のみなさまには、ご健勝にてご活躍のことと拝察いたします。

今年も秋以降には市内で様々な催しが行われました。顕彰会では多くの催し—「ふれ愛祭」や「まちの駅全国フォーラム in 本庄」、「県北美術展」などの場において塙先生の偉業の啓発に努めました。また、今年度が最終年度となる自治会勉強会での塙先生についての説明会にも事業部会委員を派遣し、昨年度とあわせてすでに68自治会で啓発を行ってまいりました。

今後につきましても郷土の誇りである塙保己一先生の業績を広めるため、つとめてまいりますのでみなさまのご支援をお願い申し上げます。

日ごと寒さが増してまいりますが、お体ご自愛のほど祈念いたします。

総検校塙保己一先生遺徳顕彰会

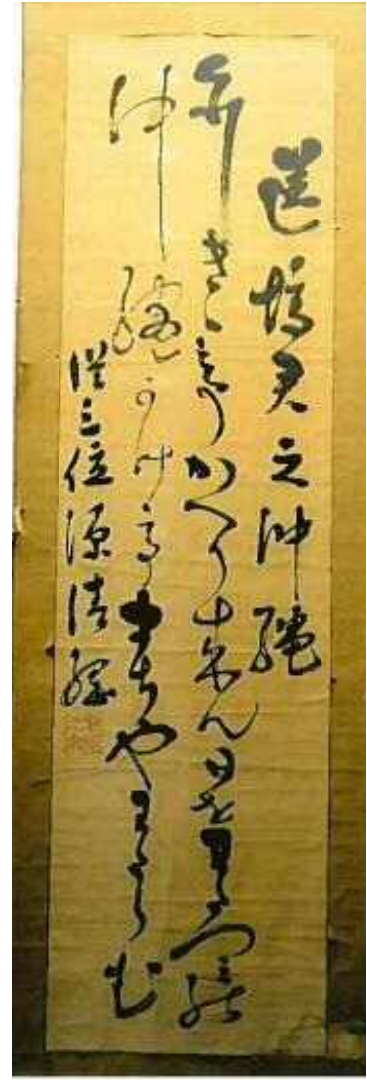
会長 吉田 信 解

本庄市塙保己一記念館にある資料紹介

塙忠雄(保己一の曾孫)への祝い・激励の掛け軸

文・顕彰会事業委員 荒井一夫

塙忠雄(一八六三〜一九二三)は国学者であり、明治十七年六月農商務省に入省し、それから四年後の同二十一年十月一日、沖縄県属として出向しました。その出向に際し、洋画家の黒田清輝(一八六六〜一九二四)の養父にあたる源(黒田)清綱(一八三〇〜一九一七)が忠雄に対して、お祝いを兼ねての激励の掛け軸を送ったものと思われまます。黒田清綱は官僚・歌人であり、書を善くし、なお、明治・大正天皇の和歌の師でもありました。



(右写真の文言)

送 塙 君 之 沖 繩
錦 着 っ て 帰 っ て 来 る 日 を
沖 繩 に わ た っ て ち ゃ わ た っ た ら つ む の

(右文言の解説)

塙君の沖縄に行くにあたって送る

錦着て(成功して)帰ってくる日を

沖繩にわたってからも待っています

(※補足説明)

「わだつみの(海をつかさどる神)」は、沖縄にかかる枕詞(昔の歌文に見られる特定の語の上にかかって修飾または口調を整えるのに用いることば)

26年度も塙先生顕彰会の会員として継続してご協力いただけますようお願い申し上げます。

みなさまからの貴重な会費は、塙先生没後195周年に建立予定の銅像建立のための費用や顕彰祭の運営、また、その他の啓発活動に使用させていただきます。まだ継続手続きをされていない方は会費の納入をお早めにお願いたします。みなさまのご協力をなにとぞよろしくお願いいたします。



年会費 個人会員 一口 千円、賛助会員(団体) 一口 一万円
入会と会費納入の受付場所 本庄市生涯学習課(中央公民館)と本庄市児玉文化会館(セルディ)で受け付けています。本庄市役所4階文化財保護課では、平日にお預かりします。
※ 郵便振替でも申し込みできます(ご希望の際には、下記へご連絡ください)。

発行 総検校塙保己一先生遺徳顕彰会
事務局 本庄市教育委員会 生涯学習課 本庄市児玉文化会館(セルディ)内
所在地 367-0216 埼玉県本庄市児玉町金屋728-2
電話 0495-72-8851 FAX 0495-72-8854

※点訳ボランティアグループ「ほきの六点会」の皆様により会報誌の点字翻訳版を作成していただきました。ご希望の方は、事務局までご連絡ください。